《西洋史研究室の現在》

大学院修了者の研究

上柿　智生

私が研究しているのは 15 世紀のビザンツ帝国の滅亡前後の時期、帝国が外からの軍事的・文化的な圧力にさらされる状況の中で当時の知識人たちが彼らの了解した伝統のうちいかなるものに基づいて自らの属する集団を画定・定義し、どのような表現と言説を用いることでその集団のアイデンティティを表出して個別具体的な状況に応じてその力点を移動させていったのかという問題です。自らの属する集団、というのはいかにも曖昧模糊とした表現ですが、近代国民国家成立以前にあっては主権国家の統治域によって明確に定義された成員による階層横断的なナショナル・アイデンティティが構想され普及することはなく、ビザンツ文人たちの集団的アイデンティティも、教養層あるいは首都住民としての特権意識や帝国への帰属、もしくはギリシア語話者正教徒一般をも包含しうる文化的諸伝統（言語・宗教・習俗など）の共有など多様な形を見せ、互いに重なり合いながらも柔軟に形を変えていくものでした。とはいえ、おおまかに言えばビザンツ帝国でも後期に至ってカトリック世界とも歩調を合わせるように国家に匹敵する規模のエスニックな集団の意識が生まれ始めるのですが、その際に集団のアイデンティティの核として従来からのローマ人／ローマ帝国の伝統に加えて新たに持ち出されたのはギリシア文化やキリスト教時代をも含むギリシア人としての歴史でした。このギリシア称揚は、ビザンツ固有の文脈としての異教思想への危惧をもはらみ、それを念頭に知識人たちはギリシアの概念を巧みに調整しつつ、ムスリムやラテン人といった他者に対してビザンツ人の特性を戦略的に提示することになります。彼らによって展開された集合的アイデンティティの多様な表現態は、近代ネイションへと目的論的に還元されないギリシア語話者正教徒集団の長い持続と変化の歴史における一つの画期をなし、同時に西洋文明の起源として西欧に領有されたギリシアとはまた異なったギリシアの概念のあり方に私たちの目を開かせてくれるのではないかと考えています。

（三重大学等非常勤講師）

庄子　大亮

執筆依頼に対し、私が本来そうあるべき古代ギリシア史専攻者らしきことをしておらず逡巡したが、以下のような方向性も生産的に受けとめてくれる人がいるかもしれないと考え直し、述べさせていただく。

私の関心は、古代の神話伝説の成立背景や機能から、それらに影響を受けたり類比されたりする後代の言説・表象に至る。近年の活動でいえば、遍在する洪水神話（大洪水で世界が滅亡しかける物語）の成り立ちや、それが今に継承される意義について論じた（『大洪水が神話になるとき』河出書房新社、2017 年）。

そして、洪水神話とも重なる「大災害によって失われた陸地」についての歴史性を帯びた伝説を対象に、事実ではない（が、ときに事実より影響を及ぼす）「偽史」の成立事情を問うシンポジウム「近代日本の偽史言説」（立教大学、2015 年 11 月）の報告で、日本におけるその伝説の受容と影響を考察した（「『失われた大陸』言説の系譜―日本にとってのアトランティスとムー大陸」小澤実編『近代日本の偽史言説』勉誠出版、2017 年、334-365 頁）。これをふまえ、西洋のみならず日本も意識し、歴史

学に相対してきたようなオルタナティブな歴史観の（もちろん支持ではなく）解釈史を構想している。それは学問と一般社会との乖離を浮き彫りにしつつ歴史学のありようを再考することにつながるだろうし、日本からこそ発信できるような議論となれば、なおのこと意義深いだろう。

また、神話伝説の継承をまとめた拙著（『世界を読み解くためのギリシア・ローマ神話入門』河出書房新社、2016 年）が縁となり、神戸大学「近代神話」研究プロジェクトに参加させていただき、古典受容研究（Classical Reception Study）の観点から、北米と日本の映画や漫画、ゲーム等における神話受容の背景をめぐる分析の一端を形にした（「神話の今を問う試み―ギリシア神話とポップカルチャー」植朗子ほか編『「神話」を近現代に問う』勉誠出版、2018 年、216-231 頁）。ここからさらに幅広く、西洋古代の歴史・文化の、現代に至る受容と表象についての考察を展開していきたいとも思っている。

地に足がつかないことばかりしているが、足がくっついて動かないよりは良い。それでこそ紋切り型ではないところから西洋史研究に貢献できるかもしれない。

（関西大学等非常勤講師）

杉本　陽奈子

古代ギリシア、特に紀元前 4 世紀アテナイに集まった人々が行っていた商業活動について研究しております。元々、古代ギリシアといえば市民による民主政、青い海、そして壺絵などの美術品というイメージがあったのですが、学部生時代に西洋史配属となり専門的な勉強を始めてみて、美術品を作成したりエーゲ海を航海して交易に従事したりしていた人々の多くが、実際にはポリス外部からやってきた非市民（外国人）でありポリス社会の「アウトサイダー」であるとされていることを知りました。そこから、彼らが市民とどのような関係にあったのかという点に興味を持ち、卒論では職人と彼らに対する蔑視の問題を取り上げました。修士課程・博士後期課程進学後は考察対象を海上交易商人や銀行家たちにまで広げて、商業活動とポリス社会との関係を様々な観点から分析しています。OD 生活 2 年目の現在は、これまでの研究成果をまとめた博士論文を執筆しているところです。

前 4 世紀のアテナイでは食糧不足が深刻な課題となっていたことから、国外から穀物を供給する必要に迫られていました。そのため、外国人を中心とする海上交易商人たちを誘致するべく、アテナイでは商業裁判制度を整備したり、交易に関する奉仕を行った商人を顕彰したり、商船を保護したりする試みがなされていました。ところが、先行研究ではこうしたアテナイ側の対応には注目しているものの、そこで定められた諸制度がなぜ実際に機能したのかという点については十分に明らかにされていない状況にあります。これは、商業の実際の担い手であるはずの商人や銀行家たち側の視点が欠けているからではないかと考えています。そこで、アテナイ社会と商業活動との関係を、商人や銀行家の人的紐帯が果たしていた役割に注目しつつ詳細に検討することによって、当時の商業活動がどのように支えられていたのかを明らかにすることを目標として研究をすすめています。

（京都大学非常勤講師）

谷口　良生

議会主義的な性格を強くもつフランス第三共和政の議会史について勉強しています。現在の肩書は、京都大学大学院非常勤講師ですが、2018 年 9 月から 1 年間、かつて第三共和政期の国会議員研究の中心であったパリ第 1 大学と第 4 大学の共同

組織である19世紀史研究センターで学ぶこととなりました。

目下執筆中の博士論文では、従来、国会のみを叙述対象としてきた第三共和政期の議会史に対して、国会と地方議会を含めた歴史像を模索すると同時に、その実際がほとんど検討されてこなかったといってよい議会共和政を、制度・実践・政治文化など、多角的かつ社会史・文化史的に分析することで描くことを目標としています。くわえて、最近では、議会共和政それ自体を、より長期的なフランス近代史の枠組みにどのように位置づけるか、主として歴史叙述の観点から少しずつ考えるようになりました。

また、議会史研究がひとつのジャンルとして定着していないフランス史研究において、議会や議員、あるいはより広く議会政治にかかわる諸主体について、どのように研究することができるかということも考えています。ご存知のとおり、議会史といえばイギリス史研究の「専売特許」とみなされています。それに対して、フランス史研究は伝統的に議会外の民衆や労働者による運動に着目し、豊かな研究成果をもたらしてきました。それ自体がフランス史の特質の一つを示しているわけですが、しかし同時に、議会にほとんど目が向けられてこなかったこともまた事実です。これまでに蓄積されてきたフランス史全般の成果をふまえながら、議会史というレンズを通して新しいフランス史像を構築していかなければならないと思っています。

（京都大学非常勤講師）

谷田　利文

私は「近世フランスのポリスとエコノミー」という主題の下、17 世紀初めから革命前夜までの、ポリスとエコノミーの両概念の関係性、変化について研究しています。近世フランスのポリスは、治安維持だけでなく、より広く人々の生活の細部に介入し、快適で平穏な生活を与える技術でした。その中で、穀物の低価格により、暴動を防ぐ安全弁の役割を持っていた食糧ポリスは、1750 年代から始まった穀物取引論争でフィジオクラット等に批判され、穀物取引の自由化による農業の再興が求められました。したがって、18 世紀のフランスは、大まかにはポリスから市場原理を組み込んだエコノミーへの変化と整理できますが、両概念の検討により、この整理が不十分なことがわかります。ここでは紙幅の都合から、17 世紀初めのモンクレティアンと、1770 年代のガリアーニの議論を紹介したいと思います。

18 世紀後半のフィジオクラット等の議論は、エコノミー・ポリティークと呼ばれていましたが、その言葉の創始者とされるモンクレティアンにおいては、意味内容が異なっていました。エコノミー・ポリティークとは、古代の家政（エコノミー）を国家に拡大した、国家の財（物・人）の管理運用の学とされ、市場原理ではなく、王権の強い介入を求めるという点で、経済学というよりもポリスの起源と呼べる内容となっています。

またガリアーニは、自由化後の穀物価格の高騰と暴動の頻発を受け、抽象的ではなく、地理や時代状況など、特異な状況に基づく議論を主張しました。偉大な自然と卑小な人間の時間認識は異なっており、市場原理による長期的な富の拡大の前に餓死してしまう人間への短期的な配慮の必要性が示されました。その際、人々の生活の細部に作用し、一般的ではなく、特殊な状況に対して作用するポリスの必要性が改めて主張されました。

このように、ポリスとエコノミーは、単線的な変化・発展ではなく、両者が入り組んだ複雑な関係をなしており、それを説き明かすことは、集団としての人間が、統制と自由の両方を用いていかに統治

されてきたかを教えてくれると考えています。

（関西大学等非常勤講師）

増永　理考

ローマ帝国は、地中海を内海とする広大な領土を支配下に収めたが、それは同時に多様な文化の包摂を意味した。中でも、支配者たるローマ人は、彼ら自身としばしば対置されるギリシア人の文化に魅了されたことが知られる。では、ときに皇帝をも虜にした文化を有していた当のギリシア人たちは、ローマ帝国下においていかに暮らし、ローマ帝国という現実に対していかに対峙していたのであろうか。そして、彼らの暮しを通して見えてくるローマ帝国の支配とはいかなるものであったのか。このような問いが私の研究の根底にある。

かかる問いに一定の解答を与えるべく、私が注目するのは、小アジア（現在のトルコ）に拡大していたギリシア人都市である。というのも、帝国に点在する都市は、依然として人々の生活の基盤であったとともに、その都市を軸として、とりわけ小アジアの人々は、ギリシア本土の人々以上に積極的にローマ中央政府と接触していたことが窺えるからである。

具体的には、これまで、公共建築物の造営や祝祭の開催といった都市社会の維持、あるいは発展に関する問題を論じてきた。これらは、都市のアイデンティティに関わる問題であったとともに、都市有力者による私費を中心とする莫大な金銭が投じられたことから、経済的な重要性も有していたのである。このような建築物、および祝祭に関して、その整備過程において都市がいかに関与していたのか、そしてその目的は何なのかといった問題を実際に問うてきた。

こうした問題にアプローチするための材料となるのは、小アジアのギリシア都市で多数建立された碑文史料である。それゆえ、上記のような研究に加えて、これまで私は、膨大な数を占めるこの碑文史料のさらなる利用可能性を探るべく、「空間論」や「言語行為論」から碑文を理解するという史料論的な議論も、主たる研究の方法論に関わるものとして取り組んでいる。

（京都大学非常勤講師）

元根　範子

ノルウェー王国の国王であり聖人であるオーラヴ二世（在位 1015-1028 年、以後聖オーラヴと表記）に対する崇敬がノルウェーを中心に北海・バルト海沿岸・北大西洋の島々に広がっていることに着目し、キリスト教世界の周縁である当該地域において共有される信仰のあり方について関心を持ち、学部から一貫して研究に取り組んでいます。

北欧の中世といえばヴァイキングや彼らの文化に注目されがちですが、紀元 1000 年を境に北欧はラテン＝カトリック教会の影響圏に入り、ヴァイキング活動は下火になっていきます。聖オーラヴはその過渡期に活躍した人物であり、彼への崇敬はノルウェー王国の支配域を超えて広がっていました。ローカルな聖人であり、また生前は国王であった存在をなぜ人々は崇敬したのか（崇敬目的）、誰が崇敬したのか（崇敬関与者）、いつ頃拡大したのか（崇敬時期）などの観点から『北の世界』の信仰のあり方や文化の共通性などを見出し、一つのモデルケースを提示したいと考えています。史料は複数の地域の教会史や寄進のチャーター、年代記、祈祷書、サガ、スカルド詩を利用しています。

現在は、スカンディナヴィア以外の地域、特にブリテン諸島における聖オーラヴ崇敬を中心に研究を進めています。ブリテン諸島は 1000 年以前よりヴァイキングの襲撃・交易を通してスカンディナヴィアとのつながりが深く、中でもオークニー諸

島は15世紀にスコットランド王国の支配域に入るまでノルウェー王国の影響下にあり、長期間スカンディナヴィアの影響を受け続けた地域であるといえます。更に、イングランドの司教がノルウェーの司教位を保持していた時期があり、彼が聖オーラヴとの強い繋がりを持っていたと考えられること、また、比較的早い時期からイングランド内で聖オーラヴへの教会奉献がおこなわれていたことからもスカンディナヴィア外の地域における崇敬のあり方の事例として検討するにふさわしい地域であると考えています。

また、ブリテン諸島での崇敬のあり方を明らかにすることでブリテン=ノルウェー関係史についても取り組みたいと思っています。

（京都大学非常勤講師）